

2010じゃっとスタディツアー報告

2010年12月24日～12月31日、10名にて現地の活動を視察してきました。

12/24 (金) 鹿児島空港出発～ソウル～ハノイ空港到着

空港での待ち時間で学生たちは交流を図っていました。(ハノイ泊)

12/25 (土) 午前 ハノイ市内観光～夕刻ビエンチャン

ラオス料理レストランにて夕食。ラオス音楽を聴きながらラオス料理を楽しみました。(ビエンチャン泊)

12/26 (日) ファノイ小学校訪問 机椅子記名作業 寄贈式

昨年より援助対象校となったファノイ小学校を視察。机椅子記名を行い、学校設備等の寄贈式を行いました。当日、生徒、父母によってコンクリートむき出しの校舎にペンキ塗りが行われていました。クリーム色のペンキを塗られ、教室が明るくなったように感じました。



● ペンキ塗り中の父母の方々



● 記名を待つ子供達



● 渡辺君から文具、絵本を受け取る校長先生

ノンノ小学校訪問 机椅子記名作業 寄贈式 昼食会



● 記名中の白水さん、竹内さん



● 昼食の準備ができました！



● 植樹祭 (中園君と学校関係者)

今年度より対象校となったノンノ小学校です。

12月14日までにお預かりした机椅子募金による机椅子約50セットの記名作業を行いました。

タラサオ市場見学 夕食会 ～ 日本武道場にてコンサート鑑賞

青年協力隊員としてラオス派遣されている助産師北村さん、ラオス日本語学院で日本語教員として勤務するかたわらラオス大学でラオ語を勉強中の菅原さんとそのお弟子さんのブンを交えて夕食会を行いました。学生たちは、北村さんや菅原さんの仕事の内容、ラオスでの生活でおどろいた話などを聞きました。日ラオス外交関係樹立55周年主要行事の一つであるコンサートがあり、地方の踊りや民族衣装を楽しみました。(ビエンチャン泊)

12/27 (月) ナテ小学校訪問 机椅子記名作業 昼食会 プレスクール壁絵描き ナテ村ホームステイ



● プレスクールの外観



● 自分の子供を抱っこしている先生



● 壁絵の下絵書き中の中園君

今回の学生活動の中心となるナテ村へ到着です。

ナテ村は 2002 年からの活動地で、隣のディエンデン村とクラスター方式校区で、もうひとつの学校とともにじゃっどの活動に積極的に参加し、効果の上がっている地域です。今回はこれまでの御縁もあって、学生たちの民泊を行うことになりました。その他、学生たちはじゃっどが援助したプレスクールの壁に壁絵を描くことになりました。絵本「手をあらおう」をラオス語に翻訳する御縁で講談社さんを通じて知り合えた漫画家「西山優理子」氏の下絵を元に壁絵を描きます。

ラオスでは、5 学年までである小学校敷地内にプレスクールを併設することが義務づけられました。（ラオスでは、村の規模や隣の学校との距離などで、5 年生まで設置されていない小学校もあります）そのため、今年度に入りプレスクールへの援助依頼が多くなっています。夕刻、学校近くの校長宅へ男子 2 名、女性先生宅へ女子 4 名と帖佐理事の 2 班に分かれ、民泊を行いました。電気はあっても、照明に使う程度のラオスの田舎では夕食後は寝るだけです。日本とは違う生活習慣と、異国の知らない人の家に泊まる不安でいっぱい夜を迎えたのでした。（ナテ村泊）

12/28 (火) ナテ村にて活動 現地スタッフによる「手をあらおう」を使ったワークショップ

ナテ村での二日目です。学生たちは、ラオス美術学校の先生 2 名の協力を得て、引き続きプレスクールの壁絵描きです。

ナテ村を中心としたクラスター校区の先生方を招き、DR マニパンを講師に、絵本「手をあらおう」活用の保健教育セミナーを行いました。じゃっどでは絵本など教育教材を寄贈する場合、その活用法なども一緒に伝えています。

DR マニパンは、内容説明や活用方法などを説明しますが、参加の先生たちに初見で読んでもらおうと、結構つかえながら読む先生が多いでした。



● セミナー 打ち合わせをする帖佐理事



● セミナーの様子



● 少しずつ壁画が描かれていきます

昼食は、日本から持って行ったカレールウを使って日本式カレーをホストファミリーのお母さんたちと作りしました。昼食後は、引き続き学生たちは夕方までプレスクールの壁絵作成を行いました。（ナテ村泊）

12/29 (水) プレスクール壁絵描き～贈与式 パーシー その後村人と会食

朝、起床後各家庭のお手伝いをした後、壁絵の仕上げ作業を行いました。部屋の内側を書いている最中に、子どもたちが入り「これは犬」「これは馬」などと指を指して話しはじめ、仕上げにがんばるエネルギーとなりました。 昼には子どもや村人が学校へ集まり、贈与式が行われました。その後、ペンキ塗り立てのプレスクールの部屋で「パーシー」を行い、お約束の宴会となりました。



● パーシーに参加



● 左から帖佐徹さん、小幡理事、コンサップ氏



● 村人たちが集まりました



● みんなで踊ったり歌ったりしました



● いよいよ宴会の始まりです



● 左から石神さん、大迫さん、村方さん

サムケ小学校 プレスクール視察 絵本や学校設備品などの贈与

ナテ小学校同様、2002 年からの支援校サムケ小学校へ移動し、整備された図書館やプレススクールを視察し、絵本「手をあらおう」と要望のあった扇風機などを寄贈しました。



● サムケ小学校長、小幡理事長



● 夕日を見つめるじゃっどメンバー



メコン川に沈む夕日を見てから食事

毎回の参加者から好評のメコン川に沈む夕日を見に、メコン川沿いの公園へ出かけました。

例年のようにビールを飲みながらの夕日鑑賞とはなりませんでした。雲一つない夕景は素晴らしいものでし。学生たちにとって食べ慣れないラオスの村ご飯が、3日間続いた後でしたので、リクエストの「スイーツ」「チーズを使った食事」へと出かけました。(ビエンチャン泊)

12/30 (木) ラオス国立医療学校見学～マホソット病院見学～市内観光 ～ハノイ～ソウル (機内泊)

参加者の村方さんがシニアボランティア職員として 2001～2002 年に勤務していたラオス国立医療学校を見学です。日本の看護学校や医療学校と比べると寂しい感じの学校ですが、ラオス唯一の医療関係職員養成学校です。日本との医療格差を感じることでした。ラオス国立医療学校の先生の紹介で、国立マホソット病院を見学しました。国立ではラオス一番と言われる病院ですが、こちらも医療格差を感じることでした。



● 寄生虫の標本



● 竹内さん、マホソット病院の
看護師さんと記念写真



● マホソット病院内

12/31 (金) ソウル～鹿児島空港にて解散

やっと鹿児島に着いたと安心したら、なんと鹿児島地方は 45 年ぶりといわれる大雪でした。皆様、おつかれさまでした！（小幡 順子）

私がラオスに行って一番印象深かったのはラオスの子どもたちのことでした。ラオスの子どもたちはとても人懐っこくて、日本から来た私たちにみんな優しく親切に接してくれました。村の子どもたちは私たちをととても歓迎してくれてすぐに仲良くなることができました。

最後に到着した小学校では放課後にも関わらず、村中の子どもたちがやってきてみんなで鬼ごっこをしたりして遊びました。みんながどんどん集まってきてくれて、私はほんとうに嬉しかったです。子どもたちはゲームなど部屋の中で遊べる道具を持っていないので朝早くから友達と外で遊んでいます。日本の子どもたちもラオスの子どもたちのように外で思いっきり遊ぶことができたらいいのと思いました。次に印象に残ったことは子どもたちが衛生的にあまりよくない状況で生活していたことでした。子どもたちの制服はあまりきれいではありません。シャンプーは貴重品らしく、髪の毛をあまり洗わない子もいるようでした。特に男の子たちの中に多かったのはほとんど髪を洗ってなくて髪が固まってしまって、少しにおいがしている子などもありました。

じゃっどのみなさんがラオスの小学校で衛生面の指導をなさっているわけが本当によくわかりました。これは村の外の方が教えてあげないとだれもこの子たちに衛生面のことを教えてあげられないと思いました。わたしもこれからこの子たちのために出来ることがあったら、募金や寄付などで協力していきたいと思います。ラオスは物質的、衛生的には日本よりまだまだ遅れています。しかし、決して貧しい国、恵まれない国ではないと思います。人びとはみんな信頼し合って助け合って幸せに暮らし、笑顔を絶やさず毎日を一生懸命生きていると思います。子どもたちの目はキラキラと輝いていました。みんな心がとても平和でとても豊かなのです。



今回スタディツアーに参加して、ラオスの現状、文化を肌で感じることができました。特に、ナテ村でのホームステイは僕にとって貴重な経験となりました。日本と異なる文化言語のもとで暮らす人々とどのように接すればいいのか不安でいっぱいでしたが、身振り手振り問わずかなラオ語の知識でなんとか2泊3日を過ごすことができました。そのときに一番大切だと思ったのが『笑顔』でした。笑顔さえあればコミュニケーションはとれるのだと実感しました。笑顔こそが世界共通語なのです。ラオスはまだまだ発展途上ですが、ラオスには言葉では言い表せないほどの素晴らしい文化があり、素晴らしい人々とはいっぱいでした。それらを決して失うことなく、ラオスが発展できるように何らかの形で支援ができればと思います。

コプチャーイ（ありがとう）、ラオス！！

コプチャーイ、ラオスの人々！！



ラオス、食べ物がおいしくて親切な人々がいっぱいの国です。

私は国際協力に興味があり、開発途上国のラオスを自分の目で直接見て感じたかったので、ラオスタディーツアーに参加しました。

この7日間で特に印象に残ったのがホームステイです。私は、ホームステイをしたことがない上に、ラオスの生活に馴染めるかとても不安でした。でも、ナテ村の人は皆親切でずっと笑顔で接してくれたので、すぐに不安はなくなりました。その中で、一番大変だったのは水浴びです。日本のようにシャワーもなければ浴槽もなく、お湯もでないので、桶に入っている水を使い体を洗うのですが、とても水が冷たくて掛けるたびに叫んでいました。トイレも自分で流さなければならないので、水に関しては苦労しました。

私は改めて日本は恵まれていると思いました。ひねるだけで好きなだけお湯がでて、トイレも自動で流れる所もあるし、不自由なく生活していたのだと感じました。私がなにげない普段生活を思い返すことができたのは、このスタディーツアーでホームステイをして多くの人々と出会えたおかげです。言葉が通じなくても思いはしっかり通じるのだと実感させられました。将来、ラオスをまた訪れるつもりです。どのくらい発展しているのか見てみたいです。そして、ラオスの人々にお世話になった分、貢献していきたいです。本当にこのような機会を与えてくださって、とても感謝しています。ありがとうございました。



純心女子大学看護学科1年 竹内真央

私は学校保健に興味を持っていたので、ラオスの学校や衛生について学ぶことができるこのラオスタディーツアーに参加しました。村でのホームステイや病院見学、青年海外協力隊の方の話も聞くことができました。手洗いの必要性を大人の方に絵本を読みながら現地の医師と一緒に指導していました。私は衛生についてのセミナーがここからなのかと衝撃を受けました。ゴミがたくさん落ちていたり、紙がないトイレだったり驚くこともたくさんでした。しかし、これらの体験から私は、言葉や文化、環境が違っても「笑顔」は世界共通であると実感しました。あいさつの時、子どもたちと遊ぶとき、何か聞きたいとき、目と目を合わせて笑顔を伝えれば相手も笑顔で返してくれる。このやりとりがとても楽しかったです。人と人が通じ合えるのは言葉よりも笑顔だと思いました。次に、持続して支援することが大切だと思いました。1回何か支援したからずっとそれがきけるようになるというわけではなく、何年もかかって、たくさんの人々の支援があり変化していくと思いました。また、私たちが何かをして終わりではなく、現地の人と一緒にしたり伝えたりすることでラオスの人たちが自身で発展していけるように支援することが大切だとわかりました。最後に、私は今まで日本の衛生があたりまえだと思っていましたが、ラオスの現状を見ることでたくさんのことを考えさせられました。これからは世界に視野を広げ、環境や衛生についても学び、ボランティア活動にも参加していきたいと思います。そして、看護職は幅広い分野で活躍することも分かったので、これから大学で学びながら自分がどんな看護職につきたいのかも考えていきたいと思っています。



得意の
ハンヤを披露

今回、初めての海外スタディツアーということで、たくさんの不安や期待の中参加させていただきました。もともと貧しい国への支援・ボランティアに興味があり、いつかそのような活動に参加し支援してみたいなと思っていました。しかし支援するといっても、ただ貧しいということしか分からず、具体的にどこをどう支援すべきなのか明確ではありませんでした。そこで今回、このスタディツアーをとおして実際に発展途上国に行き、自分の目で見て体験し支援すべきことを明確にすることができました。



ラオスでは、ご飯を食べる前やトイレの後、手を洗っていなかったり、お風呂の際石鹸やシャンプーで洗うことは日本のように習慣化されていませんでした。これらから、衛生面でかなりの遅れがあると感じました。衛生面をきちんとしなければ様々な病気にかかり、ひどければ命を落としてしまいます。

また、今回の体験で私たちがどれだけ守られ、安全な環境にいるのかということに改めて感じました。村にホームステイをさせていただきましたが、水道はなく甕に入っている水を汲んでお皿を洗い、お風呂はシャワーもなくお湯もないので、自分で水をすくって流すという生活でした。お湯が出てお風呂に入れることは当たり前のことではないのだと思いました。ラオスに行き、今後自分がどう支援できるのか、そして更に興味を持つことができました。これを機に、このような活動に参加し、継続していけたらと思います。

今回の体験は私の人生の中でとても大きな財産となりました。携ってくださった方々に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



折り紙中

鹿児島大学歯学部歯学科一年 渡辺大祐

私は発展途上国の医療に興味があり今回のツアーに参加させていただきました。今回のツアーでは小学校をまわり手洗い指導などを行いましたが、歯磨き指導に関してもポスターが教室に貼ってありました。

ホームステイをナテ村でさせていただきましたが、宿泊した家には洗面台などというものはなく、台所は居住スペースとは別になっていました。また、お風呂は壺に水をいれ、体にかけるといった簡易的なものでした。このような生活を直接経験して日本は恵まれた国なのだと改めて実感しました。そしてこのような環境はどうなのかと思いました。

将来的に私は口唇口蓋裂という病気を治療したいと考えています。今回のツアーを終えてそのような医療行為とは別にラオスのような発展途上国のためにできることを自分で考えて実行していきたいと思います。直接目で見て体で感じることでできたことは非常にいい経験となりました。

今後の自分の糧とし、日々精進できるようにしていきたいと思います。ありがとうございました。



眼差しは真剣！



7年ぶりのラオス

村方 千鶴

2003年の11月末にシニア海外ボランティアから帰国してから、7年ぶりのラオスはいろいろな意味で驚きでした。

私が足代わりに使っていたツクツクが減り、変わって車が増え、信号機が増え、また、観光客が増え、ホテルが増えとびっくりです。7年前は、あんなに車が渋滞する事なかったですもの・・・もったのんびりした首都ビエンチャンだったのに、少し騒々しくなった気がしました。

そんな中、私の配属先だった医療短大は、外観も同僚たちもほとんど変わっておらず、毎日通っていた7年前にタイムスリップしたようでした。事前に見学を依頼していたので、実習室がきれいだったのには、可笑しかったです。いつも「誰かが見学に来る」というと、あわてて、生徒に掃除させていましたから(笑)

マホソット国立病院の検査技師長だった人が、医療短大の学長に、いつもふざけあっていた検査技師が、病院の技師長にそれぞれ昇進していたり、医療短大の同僚たちの中には、独身だった人が結婚して子供まで居たり、子供が1人から2人に増えていたり、スレンダーだった人が倍ぐらいに太って居たりと、そういった意味では、7年の歳月を感じました。

もっとゆっくり、彼らと話がしたかったです。でもあんなに勉強したラオス語がぜんぜん話せず、これにはショックでした。やはり、にわか仕込みの語学は、使わなければ完全に忘れちゃうのですね。「もう一度勉強しなみなきゃ！」って思いました。

私は6名の学生さん達のお世話はあまり出来なかったけど、皆さんの柔軟性には驚かされました。ラオスの典型的なおもてなしである、何時間でも続く歌と踊りにすぐ溶け込んでいたし、ラオス料理も抵抗なく食べていたしと。

国際協力とか援助とかにこだわるのではなく、日本から出て、いろんな国やいろんな人を知ることが大切だと思います。外から見ると日本の事もよくわかります。そういった意味でも、この1週間の異文化との触れ合いで何かを感じ、小さな芽が芽生えてきたら嬉しいです。

